

【人口問題からみる医療の変遷】

平成 23 年 2 月「国土の長期展望」中間とりまとめによると、日本の総人口は鎌倉時代の 1192 年に 760 万人、室町時代の 1338 年に 820 万人、江戸時代の 1603 年に 1,200 万人、約 400 年かけて 500 万人(1.6 倍)という緩やかな増加傾向でした。江戸幕府成立後、第 8 代将軍徳川吉宗の享保の改革まで 140 年間に 2,000 万人(2.5 倍)にまで増えたものの、その後は再び緩やかな増加傾向に転じ、明治維新を迎える 1868 年には 3,300 万人、120 年間に 200 万人(5.5%)の増加にとどまっています。鎌倉時代から明治維新まで、日本の総人口は 700 年かけて 2500 万人(3.3 倍)となりました。

明治維新後、1945 年第二次世界大戦終戦時には 7,200 万人(2.2 倍)、さらに 2000 年 12,700 万人(1.8 倍)、明治維新からピークを迎える 2004 年 12 月まで、130 年間で 4 倍に増えました。この先、2100 年時点の中位推計(低位推計～高位推計に幅があります)によると 4,800 万人、人口ピークからの 100 年間で 63%減る計算となり、高齢化率も 41%と推計されています。1900 年から 100 年かけて増えていったのとほぼ同じスピードで、2000 年から 100 年かけて日本の総人口は減っていきます。

多くの生産年齢人口が若年者・多くの生産年齢人口・少ない高齢者を支える社会から、限られた生産年齢人口が少ない若年者・限られた生産年齢人口・多くの

高齢者を支える社会へと、パラダイムシフトが生じています。

1975 年から 2025 年までの 50 年間で医療は目覚ましく進歩しました。前半 25 年間は人口増加と同期するように医療が発展していきましたが、後半 25 年間も医療は目覚ましく進歩、その一方人口は逆相関し減少、少子高齢化に拍車がかかっています。

高度な医療には労力も費用もかかります。人材は都市部に集中し、地方では枯渇しています。現実を踏まえた上で、何が実現可能で何が困難なのか、冷静に見極めなければなりません。現場では抱えて生きる・支える・癒やす・看取る慢性期医療(地域密着型多機能医療)が、治す・救う急性期医療と比べると軽視されているように感じるのです。